

## W・シュルツ研究の新段階

— W. Grab, Ein Mann der Marx Ideen  
gab, Droste, Düsseldorf, 1979.

植村邦彦

### 1.

シュルツ (Wilhelm Schulz, 1797—1860) の名を聞いて、彼がどのような人物であるのかをすぐに思いおこせる人は、少ないであろう。1810年代後半の神聖同盟下のドイツのブルシェンシャフト運動の活動家であり、三月前期の社会理論家であり、1848年革命時のフランクフルト国民議会の左派議員であるシュルツの名は、しかしマルクスの『経済学・哲学草稿』の読者には、『生産の運動<sup>(1)</sup>』の著者としてよく知られている。シュルツは、マルクスの『草稿』第1草稿において、アダム・スミス、J・B・セーに次いで最も多く引用されている作家である。

また19世紀ドイツ文学史に通じた人なら、詩人であり劇作家であり革命家であったゲオルク・ビュヒナーの同郷の年長の友人で、チューリヒでの亡命生活を彼と共にし、彼の最期を看とった人物として、シュルツとその妻を思いうかべるかもしれない<sup>(2)</sup>。またやはり詩人であるゴットフリート・ケラーの生涯にわたる友人としてのシュルツの名を、ケラーの伝記や書簡集のうちに見出すかもしれない<sup>(3)</sup>。

しかしいずれにせよ、そこではシュルツは目立たない脇役として、ちらりとその姿を現わすにすぎない。

### 2.

シュルツその人への関心は、従来二つの方向に分裂していた。

第1は、ドイツの政治史、それも郷土史的な側面からの伝記的研究である。これに属するものとして、次のものが挙げられる（ただし、学位論文等の未公開のものは除く）。

1. Hans Nabholz, Schulz, Wilhelm Friedrich, in : *Hessische Biographien*, hrsg. v. Herman Haupt, Bd. 1, Darmstadt, 1918, S. 404—414.
2. Ludwig Maenner, Ein Querkopf des vormärzlichen Liberalismus : Wilhelm Schulz (-Bodmer), in : *Archiv für hessische Geschichte und Altertumskunde*, N.F., Bd. 13, 1922, S. 287—321.
3. Karl Esselborn, *Wilhelm Schulz. Eines hessischen Demagogen, Werdegang, Verurteilung und Flucht aus seiner Babenhäuser Festungshaft*, Babenhausen, 1934.
4. Karl Ludwig Ay, Das Frag-und Antwortbüchlein des Darmstädtischen Offiziers Friedrich Wilhelm Schulz, in : *Zeitschrift für bayerische Landesgeschichte*, Bd. 35, 1973, Heft 2, S. 728—770.

これらは主として、シュルツの、三月前期ドイツの民主主義者、革命運動家としての側面に注目したものであり、叙述の中心は、ヴィーン会議後から1830年代前半までの彼の故郷ヘッセンでの政治活動と、1848年革命時のフランクフルト国民議会での、ヘッセン・ダルムシュタット選出の議員としての彼の活動に置かれている。

第2の方向は、初期マルクス研究の流れの中での、思想史的関心からの研究である。

『経・哲草稿』を論じた文献でシュルツに言及したものは多いが、しかしほとんどの『草稿』研究者はシュルツをマルクスによる引用を通して知るとどまり、したがって彼の思想やそのマルクスへの影響について言及する場合にも、『草稿』に引用された断片の範囲で論じるだけであった。しかし、全体の文脈から切り離されたこのような読み方は、彼の思想についての理解を誤らせるだけでなく、マルクスへの影響についても、恣意的な読み込みによる解釈を

ひきおこしやすい。

例えば、マルクスによって引用された一節で、シュルツは、労働者の所得が以前より上昇しても、それが社会の総生産とそれに相応する社会的欲求との上昇率を下まわっている場合には、「相対的貧困が増加」<sup>(4)</sup>したのだと述べているが、そこからマンデルは、シュルツは「相対的窮乏化の法則」を「定式化している」<sup>(5)</sup>と見ており、またヘレも同じ箇所から、シュルツをマルクスの相対的窮乏化論の源泉とみる同様の見解を示している<sup>(6)</sup>。しかし「相対的貧困」概念の提示と相対的窮乏化の「法則の定式化」とは、また別のことであろう。

マルクスによる引用部分を超えて、シュルツの思想そのものにはじめて注目したのは、コルニュである。彼は、大著『マルクス・エンゲルス伝』の第2巻「経済学・哲学草稿」の中で、マルクスに影響を及ぼした思想的源泉として、エンゲルス、ヘスと並べて、シュルツの『生産の運動』を挙げている。<sup>(7)</sup>

コルニュのシュルツ評価の要点は、シュルツが「経済的・社会的発展の分析を通して……一種の唯物論的歴史観に導かれた」<sup>(8)</sup>ということにある。彼が言うところの「一種の唯物論的歴史観」とは、「欲求の増大に基づく生産の発展と分業とが、様々な社会および国家諸形態の連鎖ならびに階級成層と階級闘争とを条件づける」<sup>(9)</sup>という見解である。しかし彼は、マルクスはシュルツのこの見解に「与した (anschießen) <sup>(9)</sup>」と述べているだけで、後者の歴史観が『草稿』執筆時のマルクスに具体的にどのような影響を与えたのか、ということとは明らかにしていない。

その後、マクレランもその『マルクス伝』の第2章で、「『草稿』の経済学にかんする諸節は、他の著作家のだれにもましてシュルツの影響が大きかったことを示している<sup>(10)</sup>」と述べているが、この論拠は何も示していない。

以上で見たように、シュルツ研究の第1の流れは、彼の社会科学上の理論家としての側面への関心が乏しく、また第2の流れは、シュルツ自身への内在を怠ったままであって、この二つの流れは長い間互いに交わることがなかった。1962年にコルニュは、シュルツを「従来ほとんど顧慮されることのなかった<sup>(11)</sup>」と形容したが、コルニュによる再評価の試みにもかかわらず、1967年

にはマンデルも、シュルツを「今日では忘れられたスイスの経済学者<sup>(12)</sup>」と評さねばならなかったのである。

### 3.

シュルツ研究の新段階は、1974年に始まる。この年、カーデによる短いが簡潔で適確な序文を付した『生産の運動』の復刻版が出版され<sup>(13)</sup>そしてグループのシュルツ論文が、学会報告として発表された<sup>(14)</sup>。この両者共に、第1の流れの蓄積をふまえながら、思想史的位置付けの問題を提起することによって、二つの流れを総合しようとする、はじめての試みであった。

わが国では、山中隆次氏が、同じく1974年に執筆した論文「シュルツとマルクス<sup>(15)</sup>」において、シュルツの『生産の運動』に内在した再評価をはじめて行なった<sup>(16)</sup>。この論文の主目的は、「初期マルグスの思想形成、とくに唯物史観形成史をめぐる問題に対し、わが国ではまだほとんど紹介されていなかったシュルツの『生産の運動』の内容を、その一資料として提供する<sup>(17)</sup>」ことに限定されてはいるが、しかし『生産の運動』の総体に内在してシュルツを論じた独立の研究としては、わが国においてというだけでなく、コルニュの問題提起以後、はじめてのものである<sup>(18)</sup>。

昨1979年の秋に出版されたグループのシュルツ伝、W. Grab, *Ein Mann der Marx Ideen gab. Wilhelm Schulz. Weggefährte Georg Büchners, Demokrat der Paulskirche. Ein politische Biographie*. Droste Verlag, Düsseldorf, 1979, 384 S. は、40頁に満たない前稿を骨格としながら、それに大幅な肉付けを施して出来上がった400頁近い大冊である。この書は、たんに量的に大作であるだけでなく、質的にも、前稿における二つの流れの総合の試みをさらに押し進めた労作であることによって、シュルツ研究の新段階の告知そのものである。

二つに分かれた流れを総合し、そのことによってシュルツを思想史の対象として復権させようとする著者の意気ごみは、『マルクスに諸理念を与えた人』という、いささか過大な、人目を引く題の付け方に表われているし、他方でシュルツがいまだに「ほとんど顧慮されることのない」「忘れられた」人物であ

ることへの配慮が、『ゲオルク・ビュヒナーの同志、パウロ教会〔1848年革命時のフランクフルト国民議會をさす〕の民主主義者』という、説明的な長い副題に表現されている。

#### 4.

著者であるヴァルター・グラープは、テル・アヴィヴ大学のドイツ史研究所の所長であり、18世紀末のドイツ・ジャコバン派から1848年革命にいたる時期のドイツの革命運動史を主な研究対象としている歴史家である。主な業績には、シュルツ研究の他に、次のようなものがある。

#### 著書

1. *Noch ist Deutschland nicht verloren. Ein historisch-politische Analyse unterdrückter Lyrik von der Französischen Revolution bis zur Reichsgründung*, 2 Aufl., München, 1973.

(Uwe Friesel との共著)

#### 論文

1. Die Revolutionspropaganda der deutschen Jakobiner 1792/93, in : *Archiv für Sozialgeschichte*, Bd. 9, 1969.
2. Von Mainz nach Hambach. Zur Kontinuität revolutionärer Bewegungen und ihrer Repression 1792—1832. in : I. Geiß und B.-J. Wendt (Hrsg.), *Deutschland in der Weltpolitik des 19. und 20. Jahrhunderts. Festschrift zum 65. Geburtstag von Fritz Fischer*, Düsseldorf, 1973.
3. Harro Harring, Revolutionsdichter und odysseus der Freiheit, in : G. Mattenklott und K.R. Scherpe (Hrsg.), *Demokratisch-revolutionäre Literatur in Deutschland : Vormärz*, Kronberg, 1975.
4. Saul Ascher. Ein jüdisch-deutscher Spätaufklärer zwischen Revolution und Restauration. in : *Jahrbuch des Instituts für deutsche Geschichte*, Bd. 6, Tel Aviv, 1977.

この他に、1848年革命前後の革命運動史を主題とした編著がいくつかある。

グループの最近著であるシュルツ伝は、序論と次に示す8つの章からなっている。

- 第1章 三月前期「デマゴーク<sup>(19)</sup>」の青年時代、政治的扇動、および最初の拘禁。
- 第2章 七月革命前後のシュルツの政治闘争と著作、彼の二度目の告訴と要塞禁固からの脱走。
- 第3章 シュルツとゲオルク・ビュヒナーとの関係、フリートリヒ・ルートヴィヒ・ヴァイディヒの無実の死刑の暴露と裁判手続の公開のための闘争。
- 第4章 ユリウス・フレーベルと「リテラーリッシュェ・コントワール、チューリヒおよびヴィンタートゥア」を取りまくチューリヒの亡命者コロニーの文芸的・ジャーナリズム的闘争。
- 第5章 『生産の運動』の諸理念とそのマルクスへの影響。
- 第6章 シュルツの共産主義に対する判定と彼のアーノルト・ルーゲとの論戦。
- 第7章 1848年革命における政治家・ジャーナリストとしてのヴィルヘルム・シュルツ。
- 第8章 晩年の十年間、社会問題の解決に寄与するものとしての軍備縮少と民兵制とを求めるジャーナリズム的闘争。

序論で、グループは自らの書の意義を次の二点について強調している。

第1点は、これは「ヴィルヘルム・シュルツの政治的・学問的業積をしかるべく評価した包括的な伝記的叙述」(S. 12<sup>(20)</sup>)としてはじめてのものである、ということである。

第2点は、「どのような決定的な刺激を、マルクスがこの本〔『生産の運動』〕から受け取ったか、ということは、これまでの研究では不十分にしか明らかにされていない。この労作は、はじめてこの問題に重きをおいたものである」(S. 11. f.)ということ、つまり「『生産の運動』の史的唯物論の生成における意義」(S. 13)の重視である。

したがって我々も、この二点についてグループの書を検討していくことにしたい。

## 5.

まず第1点について、目次を一読すればわかる通り、たしかにこれは著者の自負するように、包括的な伝記である。全章を通じて、シュルツの政治活動・ジャーナリスト活動を中心とした生の軌跡と、彼の論文・著作・パンフレットの内容分析、意義付けとが、バランスよく配置されており「ドイツの政治的・社会的進歩のブルジョア的前衛闘士」(S. 9)、「ナポレオンの失脚から自主的な労働者運動の登場までの全期間、したがって40年の間、ブルジョア民主主義の自由という根本命題を一貫して、動揺することなく弁護した、ドイツで唯一の政治的ジャーナリスト」(S. 10)としてのシュルツの像が、説得力をもって浮かび上がってくる。著者自らの課題である「政治的・学問的業績」のしかるべき評価は、一応成功しているように思う。

ただし、マクレランの『マルクス伝』序文の言葉を借りて言うならば、シュルツの生涯の「個人的・政治的および知的という三つの主要な側面」<sup>(21)</sup>のうち、個人的側面については、グループの伝記は残念ながら十分ではない。アニーキンの『スマス伝<sup>(22)</sup>』のような、文学的想像力の駆使は別としても、例えばカーの『マルクス伝<sup>(23)</sup>』に描かれているような、ある人がどのような性格の人物であり、どのようにふるまったのかという具体的なイメージは、このグループによる伝記からはうかがうことができない。もっとも、著者自身が「政治的伝記」という限定を付していることからすれば、それ以上を望むのは虫がよすぎるというものであろう。

ここで、社会思想史的観点から興味ある点をいくつか紹介しよう。

第1章と第2章は、シュルツの思想形成期であるとともに最も波乱に満ちた政治活動の時期である、1810年代から30年代にかけてを扱っているが、そこで一貫して主張される、共和主義的統一ドイツ国家の実現という政治的理念が、それを支える歴史観においてヘルダーやヘーゲルの間人精神の発展観に基づき、また国家による社会改革という思想に関してはサン・シモンの影響を受けていること、さらに統一ドイツ国家のヴィジョンがいくつかの点でリストのそれと一致すること、を著者は多くの資料を使って示している。

第3章では、シュルツとビュヒナーの個人的親交と、それにもかかわらない

「ブルジョア的社會理論家シュルツ」と「初期社會主義的社會革命家ビュヒナー」との差異が語られ、第4章では、1830年代から1840年代にかけてのチューリヒのドイツ人亡命者群像の中で、シュルツとフリーベルとの思想的近縁性およびルーゲとの思想的対立が描かれ、第6章ではひき続き、無神論の評価をめぐるシュルツとルーゲとの論争が紹介される。

また、1848年革命時のシュルツの政治活動が叙述の中心である第7章においても、ルーゲ等の民主党左派との見解の異同が分析され、最後の第8章では、革命挫折後のシュルツの思想の一貫性と、それにもかかわらないある種のズレないし後退が、プロイセンの政治家との交渉やカール・フォークトとの論争を通して、鮮かに描かれている。

しかしながら、このような興味ある多くの論点の提示にもかかわらず、そのそれぞれを取り上げてみれば、いま一つの食い足りない感じがするのは否めない。

例えば、第1・2章でふれられているリストとシュルツとの関連にしても、ドイツの国民的統一の要求・内国関税廃止の要求に関する両者の一致が語られるにとどまり、リストとシュルツが等しくドイツの旧体制に対する「社会的進歩の前衛闘士」として、ほぼ同じ時期に等しく『ドイチェ・フイーアテルヤールスシュリフト』やアウグスブルク『アルゲマイネ・ツァイトゥンク』紙上でジャーナリスト活動を展開し、共に自由主義的百科全書たるロテック、ヴェルカーの『国家辞典<sup>(24)</sup>』に協力し、またほぼ同じころに生産諸力の理論を論じる主著を著していること（リストの『経済学の国民的体系』は1841年、シュルツの『生産の運動』は1843年）、しかしながら、リストがドイツ産業資本の本源的蓄積の理論家と特徴付けられるのに対し、シュルツはむしろ、英仏に見られる確立した産業資本の下での労働者階級の窮乏を第1の関心とする社会改革家であること、等々については、残念ながら、この書では全くふれられていない。

また、ヘルダー、ヘーゲル、サン・シモンの歴史観や国家観からの影響についても、ヘルダーの「人間の発達過程」という考え、ヘーゲルの「人倫的理念の実現としての国家」観、サン・シモンの福祉国家観や理性化した人間による



自然の支配という考えを、シュルツが「受け取った(übernehmen)」(S.104),あるいは「その著作の中でくり返している」(S. 109)と述べられているにとどまり、そもそもそれらの歴史観・国家観がどのようなものであり、シュルツがそれらをどのようにして受け入れ、またどの点で異なっているのか、ということについては、突込んだ分析はなされていない。

同じことは、第2点のシュルツとマルクスとの関係を論じた部分についても指摘することができる。

## 6.

第2の論点である、『生産の運動』の唯物史観形成史上の意義とそのマルクスへの影響について、著者の述べるところを見てみよう。

『生産の運動』そのものに対するグループの評価は、そこでシュルツが「彼自身の現在の市民社会についてすでに早くから獲得していた生産の仕方・様式への社会構造の依存性に関する洞察を、実り豊かに、より以前の歴史の諸時期に適用し、史的唯物論の本質的輪郭を示す歴史観に到達した」(S. 211)こと、それによって「後にマルクスによって定式化された史的唯物論の本質的な構成部分を先取りする認識に突き進んだ」(S. 11)こと、に置かれている。

この観点から、本書では『生産の運動』の内容が詳細に(15頁にわたって)紹介されているが、このようなシュルツの歴史観の把握と評価は、すでにふれたコルニュの見解と基本的に一致するものであり、それを超えるものではない。ただ、その意義と限界の指摘はコルニュよりは具体的で詳しいものである。

グループがシュルツの『生産の運動』における重要な到達点として挙げているのは、第1に、資本主義の歴史的制約性・過渡性の認識、第2に、生産諸条件とそれに基づく政治秩序・社会的ヒエラルキーの変革可能性の認識、第3に、物質的生産の基底性と精神的・イデオロギー的現象の上部構造的認識、第4に、生産・階級関係の継起という経済的合法則性の認識、の4点であり、他方、限界として指摘されているのは、第1に、生産手段の私的所有という資本家的生産諸関係を批判の対象として認識しえなかったこと、第2に素朴に信じられた未来のオブティミズム、の2点である。

総じてグループには、シュルツの方法を総体としてどうつかむか、という問題

関心が乏しく、論点相互の間に、例えば、資本家的生産諸関係の批判的的把握なしに資本主義の歴史的過渡性を認識しうるのか、といった疑問が生じるが、それを留保すれば、他の意義と限界の個々の指摘はほぼ妥当であり、評者もすでにほぼ同様の指摘を行なったことがある<sup>(25)</sup>。

だが、コルニユにはなかった本書の独自性は、『生産の運動』自体の思想史的位置付けにある。著者は、『生産の運動』の「諸理念の先行者」として、アダム・スミス、サン・シモン、ラヴェルニユ＝ペギラン、アントワース・バルナーヴの4人の名を挙げている。

しかしながらここでも、すでに述べた掘り下げの浅さは否めない。スミスについて著者が述べているのは、彼が『国富論』第2篇で「個々の国民の異なる政治的發展をその経済の相異なる発展と関連付けており、また人間の共同生活の分散の形態は経済的諸条件に依存していることを示し」(S. 227) ていること、その見解がシュルツの歴史観に影響を与えているということ、である。しかしそのような歴史観をわざわざスミスから学ばねばならない必然性はさほどありそうには思われぬし、何より、スミスの分業論がシュルツにどのように摂取されているのかというより重要な問題は、著者の視野から落ちている。

サン・シモンについては、「歴史の行程は経済的に説明される。社会はその統一した力を自然の支配に向け、すべての人間が物質的・精神的文化を享受できるようにしなければならない、というシュルツの述べた理念」が「サン・シモンに由来する」(S. 227)、と述べられているにとどまる。

また、ラヴェルニユ＝ペギランについては、その著書『運動法則と生産法則<sup>(26)</sup>』の「書名がシュルツの労作との驚くばかりの類似を示している」こと、そしてその書で彼が「シュルツのそれと一脈通ずる思想を表明している」(S. 227) ことが述べられているにすぎないし、もう一人の人物、バルナーヴの著作『フランス革命序説<sup>(27)</sup>』については、「それをシュルツが知っていたかどうか、それから刺激を受けたかどうかは、確言できない」(S. 228) と断りが付けられている。

このような思想の類似性という意味での「先行」性だけならば、歴史観に限ってみても、何もこの4人に限る必要はないであろうし、またシュルツの歴史

観の基礎となる生産諸力認識については、産業革命期のイギリスの作家、チャールズ・バベジやマンドルー・ユア、現状批判の認識についてはフランスの社会主義者たち、ルイ・ブランやウジェーヌ・ビュレ等からの影響も、考慮されるべきであったろう。残念ながら、グループはこれらの関連については一言もふれていない。

著者の自負している点であるシュルツ―マルクス関係の「重視」についても、我々は同様のことを言わなければならない。

グループのシュルツ―マルクス関係についての評価は、「科学的社会主義の創始者にとって……『生産の運動』は彼のインスピレーションの源泉の一つをなしていた」(S. 11)ということにつぎる。どのような点が、どのような意味において、インスピレーションの源泉たりえたのかという問題——それこそ最も我々の関心を引く問題である——について、読者は多くを期待することはできない。

『生産の運動』の『経済学・哲学草稿』への影響としてグループが挙げているのは、次の二点である。

第1に、「人間は、生産過程において、物質的財の産出を通して生活および思考の様式を生産し、再生産することによって、社会的存在として自らを形成する」(S. 240)というシュルツの歴史観を、マルクスが「我がものと」(S. 209)し、「唯物論的歴史観を構成する重要な理念」をそこから「引き出した(entenehmen)」(ibid. )ということ。

第2に、資本主義下での「労働者の状態についてのシュルツの統計的に正確で詳しい分析」(S. 232)、「競争戦と少数者の手中への資本の蓄積とによるプロレタリアートの窮乏化の進展についての統計的詳細」(S. 240)が、マルクスに「とくに深い印象を与え」(S. 232)、彼の蓄積論ないし窮乏化論の「最も重要なインスピレーションの源泉の一つ」(S. 213)となった、ということ。

この総括自体に対して異論はないが、それはすでにコルニュが指摘し、マンデルが強調したことである。しかもグループは、この総括に際して具体的な論拠を何ら挙げていない。

## 7.

総じて著者は、新しい素材を提供するに急で、それらの関連についていま一つ掘り下げが浅い点、くり返し述べてきた通りであるが、他にもう一つ、著者を制約していると思われるものがある。

それは、シュルツの『生産の運動』の「史的唯物論の生成における意義」を強調する一方で、「そのことによって、いかようにであれ、マルクスの業績が減じられたり、あるいは彼の学説の正しさに疑念をさしはさんだりされるものではないことは、言うまでもない」(S. 12)、という彼の立場である。

さらにそれと関連するが、著者はシュルツをくり返し「ブルジョア的」と形容している。その根拠は、おそらくは、シュルツが共産主義を批判し私的所有を擁護していること、および彼には資本家的生産諸関係自体への批判的認識が欠如していること、に求められていると考えられる。評者もまたかつて同じ基準から、マルクスによる規定を援用して、シュルツを「小ブルジョアの民主主義者」と規定したが<sup>(28)</sup>、顧みて思うに、このような規定の仕方ははたしてどの程度有効なのであろうか。

シュルツが批判した、1840年代初めにいたるまでの共産主義は、財産の共同所有に基づく共同体主義であり、現実には共産コロニーの形態での試行が続けられていた<sup>(29)</sup>。彼にとっては、それは、思想として個々人の自由に反し、社会現象としては一種のファナティズムであるが故に、否定すべき「粗野な」ものなのであった。また、彼の擁護する「私的所有」は、財産相続の制限という前提の下で、「国家所有」との相互補完において把握されたものであり、厳密な概念規定を欠くが故に「資本家的私的所有」を理論的に排除しうるものではないにせよ、むしろ「個々人の所有<sup>(30)</sup>」として把握されるものであった。これらの点を考え合わせるならば、シュルツを「ブルジョア的」と評する前に、彼の方法総体、および当時の様々な初期社会主義の思想との異同の検討が、さらに進められる必要があるだろう。

もとより、シュルツとマルクスといった思想的対象の関係を論じる際に、完全に「中立的」であるのは、不可能である。しかし、旧拙稿への反省をもこめて言うならば、シュルツとマルクスという問題の設定そのものに、対象それぞ

れへの相互的批判が含まれていないとするならば、そのような設定は、一者による他者の批判という、きわめて不生産的なものに終らざるをえないであろう。著者のいわば正統派的なマルクス像を不動の前提にした場合、シュルツは「史的唯物論」の前史における一つのエピソード以上の何物かでありうるだろうか。シュルツを見ることによって、マルクス像の従来見えなかった部分に照射を与えること、あるいは一部分の再検討をさせせること、このような問題意識を著者に望むのは、無理なのであろうか。

以上のような若干の不満が残るにもかかわらず、本書が著者の自負するようには、19世紀前半のドイツの革命運動の広がりの中でとらえられた、シュルツについてはじめての包括的な研究であり、思想史的観点から見てひじょうに豊富な問題の提出がなされていることは、大きく評価されるべきである。本書で提出された論点をこれ以上に深めていくことは、我々の課題となるであろう。その意味では、この書は、シュルツ研究の新段階の——著者がおそらくは望んだように——一つの総括というよりは、むしろ新段階の開始をうながす書であると言うべきであろう。

なお、巻末の文献目録は、整備されたものとしては初めてのシュルツの著作リストを含んでおり、今後の研究にとってきわめて有益なものであることを、最後に付け加えておく。

(註)

- (1) W. Schulz, *Die Bewegung der Production. Ein geschichtlich-statistische Abhandlung zur Grundlegung einer neuen Wissenschaft des Staats und der Gesellschaft*, Zürich und Winterthur, 1843.
- (2) Karl Vietor, *Georg Büchner als Politiker*, Bern und Leipzig, 1939, S. 83 ff.; Georg Büchner, *Werke und Briefe*, Hrsg. v. F. Bergemann, München, 1965, S. 317, 323—327; 手塚富雄他監修『ゲオルク・ビュヒナー全集』(全1巻), 1970年, 461頁以下; Hans Mayer, *Georg Büchner und seine Zeit*, 4 Aufl., Frankfurt a.M., 1972, S. 252 ff., 388, 430.
- (3) Vgl. Jakob Baechtold, *Gottfried Kellers Leben*, Bd. 1, Berlin, 1894, S. 235 ff., 265 f., 271; Emil Ermatinger, *Gottfried Kellers Leben. Briefe und Tagebücher*, Bd. 1, Stuttgart und Berlin, 1916, S. 171 ff., Bd. 2, S. 147 ff.; Gottfried Keller, *Gesammelte Briefe in vier Bänden*,

- Hrsg, v. Carl Helbling, Bern, 1950—1954, insbesondere Bd. 1 und Bd. 2.
- (4) Schulz, *op.cit.* S. 66; Karl Marx, *Ökonomisch-philosophische Manuskripte*, MEW EG Teil 1, Berlin, 1968, S, 478.
- (5) Ernest Mandel, *La formation de la pensée économique de Karl Marx*, Paris, 1967, p. 32. 山内昶・表三郎訳『カール・マルクス』1971年, 39頁.
- (6) Güther Herre, *Verelendung und Proletariat bei Karl Marx*, Düsseldorf, 1973, S, 52, 176.
- (7) Auguste Cornu, *Karl Marx und Friedrich Engels. Leben und Werke*, Bd. 2, Berlin, 1962, S. 119. なお, コルニュのこの見解については, 次の紹介がある。重田晃一「マルクス労働疎外論に関する一文献——A・コルニュ『マルクスとエンゲルス』第2巻第2章について」, 関西大学『経済論集』第13巻第3号, 1963年, 広松渉「ヴィルヘルム・シュルツの歴史・社会観」, 『マルクス主義の成立過程』, 1968年, 津島陽子「『経済学・哲学手稿』における疎外論の経済学的意義——A・コルニュの疎外論批判」『マルクスとブルードン』, 1979年.
- (8) Cornu, *op. cit.* S. 124.
- (9) *ibid.*, S. 126.
- (10) David McLellan, *Karl Marx. His Life and Thought*, London, 1973, p. 104, Fn 4. 杉原四郎・重田晃一・松岡保・細見英訳『マルクス伝』, 1976年, 121頁.
- (11) Cornu, *op. cit.* S. 119.
- (12) Mandel, *op.cit.* p. 32, 前掲訳, 39頁。
- (13) W. Schulz, *Die Bewegung der Produktion*. Mit einer Einleitung von Gerhard Kade: Wilhelm Schulz und die Herausbildung der politischen Ökonomie bei Marx, Glashütten im Taunus, 1974. なお, 1975年には, 『生産の運動』と同年に出版された政治的著作『ヴァイディヒの死』の復刻版も出ている。W. Schulz, *Der Tod des Pfarrers Dr. Friedrich Ludwig Weidig. Ein aktenmässig und urkundlich belegter Beitrag zur Beurteilung des geheimen Strafprozesses und Politischen Zustände Deutschlands*. Nachdruck (Zürich und Winterthur, 1843), Berlin, 1975.
- (14) Walter Grab, Wilhelm Friedrich Schulz (1797—1860). Ein bürgerlicher Vorkämpfer des sozialen und politischen Fortschritts. in: O. Büsch und H. Herzfeld (Hrsg.), *Die frühsozialistischen Bünde in der Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung*. Beiheft zur IWK, Heft 2, Berlin, 1975, S. 98—135.
- (15) 『中央大学九十周年記念論文集』, 1975年, 所収。
- (16) 『生産の運動』の編別構成等についての簡単な紹介は, すでに重田晃一氏によってなされている。重田「マルクスのパリ時代の経済学研究に関する資料的覚え書」,

- 関西大学『経済論集』第13巻第1・2合併号, 1963年, 参照。
- (17) 山中, 前掲論文, 615頁。
- (18) それ以後のシュルツ研究として, 拙稿「W・シュルツの『自由時間』論——マルクスの時間の弁証法の一源泉」, 『一橋研究』第3巻第3号, 1978年12月, および「W・シュルツの〈分業と生産諸力の歴史哲学〉とマルクス」, 『一橋論叢』第81巻第1号, 1979年1月(以下, 拙稿(2)と略記), を参照されたい。前者はシュルツの〈freie Zeit〉論をマルクスの〈disposable time〉論の一源泉として位置付けたもの, 後者はシュルツの歴史観の『草稿』のマルクスに対する影響を具体的に検討したものである。
- (19) デマゴーク(民衆扇動家)という語は, 19世紀前半のドイツでは, 民主主義者, 革命家という語とほぼ同義に用いられたが, とくに権力側からの非難語として, わが国の戦前における「アカ」や最近の「過激派」と同じような社会的通用力をもった。Vgl. W. Schulz, Demagog, in: *Staatslexikon oder Encyclopädie der Staatswissenschaften*, Hrsg. v. C. v. Rotteck und C. Welcker, 2 Aufl., Bd. 3, Altona, 1846, S. 705. シュルツはこの辞典の66の項目(うち4はリストの共同署名)を執筆している。
- (20) 以下, グラープのシュルツ伝から引用する際には, 本文中に頁数のみを記す。
- (21) McLellan, *op. cit.*, p. xi. 邦訳, i 頁。
- (22) アンドレイ・アニーキン, 松川七郎監修・小檜山愛子訳『アダム・スミスの生涯』, 1975年。
- (23) E.H. Carr, *Karl Marx A Study in Fanaticism*, London, 1934. 石上良平訳『カール・マルクス』, 1961年。
- (24) 註(19)を見よ。
- (25) 前掲拙稿(2)を参照されたい。
- (26) M. de Lavergne-Peguilhen, *Die Bewegungs- und Produktionsgesetze*, Königsberg, 1835. この歴史法学派に属する思想家の著作のマルクスの歴史観への影響について, かつてメーリンクが問題を提起し, それに対してエンゲルスが, マルクスはこの人物に関心を払ったことも著作を読んだこともない, という否定的な返答を行なっている。Vgl. F. Engels, Brief an Franz Mehring vom 28. September 1892, MEW Bd. 38, S. 480—482.
- (27) Autoine Barnave, *Introduction à la révolution française*, Paris, 1843.
- (28) 前掲拙稿(2), 69頁。
- (29) Vgl. Paul Kägi, *Genesis des historischen Materialismus. Karl Marx und die Dynamik der Gesellschaft*, Wien. Frankfurt. Zürich, 1965, S. 139; F. Engels, *Beschreibung der in neuerer Zeit entstandenen und noch bestehenden kommunistischen Ansiedlungen*, MEW Bd. 2, S. 521 ff.
- (30) W. Schulz, Communismus, in: *Staatslexikon, op. cit.*, Bd. 3, S. 291.  
(筆者の住所・東京都国立市谷保6205 アパルトヤガワ 2—G)